

令和 3 年 6 月 28 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2020

課題番号：15K04120

研究課題名（和文）教育相談における世代間伝達および聴き手の自己成長に関する質的研究

研究課題名（英文）A qualitative study about succession over generation in educational counseling and about self-formation of the younger counselors

研究代表者

廣瀬 幸市（Hirose, Koichi）

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：10351256

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）： 教員による学校教育相談に関して、現場ベテラン教員が蓄積した校内チーム体制構築の実践知について、定性データ分析により質的に概念化した。臨床ナラティブ・アプローチを共に学び合う研究会という“縦と横のつながり”の場への積極的なコミットメントが、現場若手教員にとって、個人的な意味を形成し、自身の肯定的自己意識を生成し、未来に向けた新たなモチベーションを形成した。これを通して、若手担当者の内部に、暗黙知の継承を志す指向性を準備させることができた。

学校教育相談の継承は、分掌による組織の役割分担によって促進されるのではなく、担当者の自己形成と絡んだ受け取り直しが奏功の鍵となっていることが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現場の実践知の世代間伝達において、継承していく側の内的要因を質的に捉えたという側面だけに止まらず、職域制度の設計不備という構造的問題を抽出した点に社会的な意義がある、と言えるだろう。また、本研究で臨床物語論に依拠する臨床ナラティブ・アプローチにより調査することを通して、現場で傷つき、自身の在り方に迷いを生じていた、真摯な学校教育相談担当者への心のケアを与えたことも社会的意義と言える。

本研究の研究成果として発表した国際コロキウムでの口頭発表および国際雑誌への掲載を通して、我が国におけるライフストーリーに関する研究が仏語圏の研究者に触れられるようになったことは、学術的な意義がある。

研究成果の概要（英文）： The author has conceptualized through qualitative analysis the practical wisdoms about team building in educational counseling by teachers which veteran colleague had constructed in their school. The author has also produced the followings; the junior staffs of educational counseling have made personal meanings of doing educational counseling and changed their positive self-consciousness increasing in motivation for future. So, the author has gotten the junior staffs prepare their willingness to take over the role of their colleagues in their mind.

The author has also found that succession of school counseling would not be fostered by maintenance of organizational allocation of roles and that the key factor for success would be a sense of ownership over the person in charge who are to take over it making their self-formation.

研究分野：Clinical Psychology

キーワード：学校教育相談 世代間伝達 ナラティブ ライフストーリー 臨床物語論 自己成長 臨床ナラティブ・アプローチ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 【研究開発当初の背景】

学校教育における益々多様化する現代的課題の中であって、教育相談については、その将来像を提案する先行研究はほぼ出尽くした感がある。教育心理学や学校心理学などオーソドックスな知見では、教育相談担当者による個業ではなく、チームや組織として取り組むことを早くから提言していた（田村・石隈，2003）し、社会心理学・組織心理学・学校経営学などの他領域からの視点からも、管理職の理解や方針による影響（鎌田・西山・迫田，2016）と、教育相談システムの機能化が重要要素と指摘していた（佐古，2006）。また、アメリカのスクールカウンセリングからは、校内外連携体制の構築（荊木・淵上，2012）と教育相談担当者の力量形成（西山・淵上，2009）の必要性が提案されていた。文科省の諮問委員会からは、既にチーム体制の整備・充実等による組織的な対応が答申（教育相談等に関する調査研究協力者会議，2017）されており、これらは先述の知見を踏まえており、一応の解答が出された感が拭えない。しかし、教育相談現場の担当者の実感では、担当者の特性や継続性など、そこから零れてしまう局面を意識せざるを得ない。教育相談担当者は将来的に教育相談コーディネーターとなって学校組織の経営的役割に徹すれば、現在対応している諸課題を解消していける、と額面通りに信じられる程、現場は単純ではないようである。これまで長らく創意工夫で乏しい校内資源を繋いで支援体制を創り上げて来られた先人たちの知恵は、教育相談担当者の個人的特性を問わない組織的仕組みとその制度化によって包摂される、と考えられるか疑問である。

ところで、ジェネラティヴィティ（generativity）という術語はエリクソン・E・Hの作った造語で、generate（生み出す）とgeneration（世代）を掛け合わせた用語であり、世代性や生殖性と訳されることが多かったが、やまだ（2003）はこれを生成継承性と訳している。世代と世代の関係性を作る中で、同じものを継承していくことと、新しいものを生成していく働きが必要である、という矛盾する性質を統合した概念を意図していたが、近年では、次世代育成能力という用語で主として高齢者の社会教育領域で多世代共創社会のデザインにも採用されるようになってきている。学校教育における教育相談の今後の在り方をめぐる提言・提案においては、この世代継承性に着目した研究を寡聞にして見かけない。チーム学校の十分な浸透を見るまでにはまだ時間が掛かっている中で、教育相談担当者の個業化を回避する方策を追求し過ぎた結果、現在現場に卡ろうじて残っている先人の知恵は皮肉にも放置される惧れが出て来ている。その無形の実践知を受け継ぎ、その精髓を新しいシステムに移入し、次世代に伝えていく継承の営みを担当者の個人的努力だけに任せるのではなく、後押しする必要があると思われた。

### 【研究の目的】

本研究は、ベテラン教員が蓄積した教育相談の校内体制構築をめぐる臨床の知を次世代に伝達する必要性を鑑み、特に聴き手の内的変容に着目することで、語りの場における相互作用の内容を立体的に理解することを目指した。そしてこの理解を基として、経験的に蓄積

されてきた実践知を次世代へ伝達する試みを、語りを媒介にして促進していくために必要な諸要件を探ることが、本研究の目的である。

### 【研究の方法】

本研究は研究 Ⅰ：ライフヒストリー法によるインタビュー調査に基づく、学校教育相談におけるチーム支援実践に関わる暗黙知の概念化、研究 Ⅱ：臨床物語論に基づく実践知の理解と世代間の伝達可能性を探る、この二つの側面から行った。研究 Ⅰでベテラン教員の実践知を次世代に伝達する場面を主に語り手の側から、研究 Ⅱで聴き手の内面に着目して変容学習の視座から、質的研究を行った。これらの総合的考察を通して、学校教育現場において蓄積される臨床の知・経験知の可視化を目指した。また、現職教諭の参加による実験的探索を通して、インタビュー調査による相互交流という仕掛けの有効性を検証し、実践知を次世代へ伝達する試みを促進していくための諸要件を探った。

データの分析に関しては、ライフストーリー法に基づいて行ったが、特に研究 Ⅱについては、ナラティブが本質的に内容する共同性と他者性を参考にして、関係性、文脈、生成された意味、変化プロセス(森岡,2007)に着目して、インタビュー調査で得られたデータを分析した。その際に、研究代表者がインタビュー調査実施を構成するとの立場から、関係性の中にある相互作用を含めた現実について解釈を行った。

### 【研究成果】

研究 Ⅰでは、校内チーム体制を構築する上での実践知について、定性データ分析(佐藤,2006)により5カテゴリ15概念に分類されたコードを質的に概念化することが出来た。なお、校内チーム体制構築の実践知を直接伝承するシステムを外部に構築する方法として抽出することは不可能であったが、質的研究として暗黙知を導出することを通して、現場で個別に自らの方法論を実践している研究協力者の内部に、暗黙知の継承を志す指向性を準備させることができた。研究 Ⅱを通して、自分たちの学校教育相談実践について自由に語り合える場合は、彼女らの個々の実践経験に基づくキャリア形成支援に繋がっていた。

研究 Ⅱのインタビュー調査を通して明らかになったことは、臨床ナラティブ・アプローチを共に学び合う研究会という形式の“縦のつながりと横のつながり”の場を学校教育相談の担当者たち(研究協力者)に提供したことがこれらを図らずも形成した、ということであった。参加者の自主性に多く負っていた研究会という場への積極的なコミットメントが、参加した研究協力者の“私の教育相談活動”に個人的な意味を形成し、同じ悩みを持つ先輩後輩あるいは同級生と「自由に語り合う場」(Anderson.H & Goolishian.H, 1992)において、関係所属学会への参加よりも実質的に機能していた。当該研究会の場では、ナラティブ的思考モード(Bruner.J, 1986)による私の経験世界の描写によって、自身の肯定的自己意識を生成し、未来に向けて新たにモチベーションを形成し直していた。その場はまた、既存制度で行われていた教育相談研修システムの修了生のリカレント教育の役割も同時に果たした。

このように、研究 に関してインタビューとなった対象者は、臨床ナラティブ・アプローチを協働する実践者として変容を起こしていた。これらの成果は、対面のインタビュー調査を介して教育相談の継承を研究するという本研究の方法論だからこそ可能となった、とすることができる。研究協力者が先輩へのインタビュー調査を通して同じような悩みや遣り甲斐を感じ取り、そこに時間・場所を超えたつながりを覚えたことにより、彼女らのモチベーションを発動させることに奏功したのであった。校内支援体制の構築を目指す為のシステム論的な方法論であったら、彼ら彼女らのモチベーションの変容は起こらなかつただろう、と研究 のインタビュー調査結果から言うことができる。というのも、研究協力者にとっては、教育相談が彼ら彼女らのキャリア形成に止まらない自己形成と深く溶け合っているので、自身の人生を顧みることなしには自身にとって適切な取り組みを先人から受け取り直すことが困難であることが判明したからである。

本研究は、上述したような研究成果に止まらず、研究継続中に関連したものから次のような成果が産出された。即ち、シカゴ学派ナラティブアプローチの可能性を探索するフランスの研究者チームの国際シンポジウム（Colloque International : Les sciences humaines et sociales a l'épreuve du terrain）において、語りのデータ分析の目的と方法、及び現場への適用に関して、主に研究 の成果を発表した。また、この研究発表の内容を基にして、ライフヒストリーを研究課題とする国際雑誌（Revista Brasileira de Pesquisa (Auto)Biografica）に論文投稿し、掲載された。アジアにおける成人教育に関する特集号に掲載されたことで、我が国におけるライフストーリー成人教育に関する研究が国際的に研究者の目に触れられるようになった。さらに、同叢書より出版された *Chronique du vécu d'une pandémie planétaire: Récits d'universitaires, d'Est en Ouest, premier semestre 2020* に寄稿することにより、世界の中でライフストーリー研究を進めていくことについて新たな視点を獲得することができた。

また、研究協力者ではないが学校教育相談の領域で同様の状況にいる後進の教員と共同して、学校教育現場で近年進行している現象を扱った題材で教育相談に携わる相談担当教員が予め知っておくべき視点について執筆したが、現場教員とコラボレーションする今後の新しい動きを展開している。

#### 【研究成果の位置付け】

本研究は、臨床ナラティブ・アプローチによる調査を通して、現場で傷つき、自身の在り方に迷いを生じていた、真摯な学校教育相談担当者に心のケアを与えることになった。

また、本研究は結果として比較的に中長期に亙る調査研究となったこともあり、教育委員会の制度的改善を見ないまま、中教審答申のチーム学校というコンセプトあるいは公認心理師という国家資格の発足により、インフォーマントとなった教員の所轄教育委員会の採用していた教員による学校教育相談モデルが流行遅れとなり、現場レベルでの継承が無意味化してしまったことを、本研究では皮肉にも同時代的に体験することになった。

ところで、ベテラン教諭に教育相談についてインタビューした経験がどのような形で各人のライフストーリーとして語られてくるのか、臨床ナラティブ・アプローチを通して聴取することから浮かび上がってきたのは、研究協力者が所属する教育委員会の規定する教育相談の位置付けがインタビュアー各人の個人的経験に影響を及ぼしている、彼ら彼女らのキャリア形成に止まらない自己形成に深く溶け合っていることである。研究開始当初、研究協力者によるアクティブ・リスニングのインタビュー自体が、対話的構築主義に関する理論的方法論(桜井ら, 2020)の指し示すように、世代間伝達を受ける側の自己変容の経験を促進するだろうと予想していたが、世代間伝達のネックとなっているように感じられたのは、学校教育相談を現場で実施している教員たちの職域確定(規定による定義)の問題であった。彼ら彼女らが職場で安心して教育相談に取り組める環境を確保することが、学校教育相談を継承していく前提条件として最重要であると思わされるケースに出会うことが少なくなかった。学校教育相談の継承は、現行の分掌という位置付けだけでは十分でなく、制度的な裏付けが不可欠である。

#### 【今後の展望】

しかるに、現在も現場の中堅教員として従事している研究協力者は、少なからず不安定な境遇の中で目の前の生徒に報いようと、制度の狭間に零れ落ちる仕事を自らの責任として引き受けなければならないという困難な事情がある。この構造的な問題に挟まれて心身のバランスを崩している、研究協力者と同じような経験をしている関係者を、臨床ナラティブ・アプローチの研究実践を通して、臨床心理的にも援助実践することが次のステージとして想定できた。既に、本研究でも活用された *l'histoire de vie* の手法が、今後のインフォーマントへのアフターフォローを兼ねたアプローチ方法(研究方法)として有効であることを研究のインタビュー調査を通して見出している。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Morioka M., Matsumoto K., Hirose K.	4. 巻 Vol.4 No.12
2. 論文標題 Narrative-based research and psychosocial practices in Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Revista Brasileira de Pesquisa (Auto)Biografica	6. 最初と最後の頁 849-863
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.31892/rbpab2525-426X.2019.v4.n12.p849-863	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 廣瀬幸市	4. 巻 8
2. 論文標題 インタビュー調査のデータ分析に関する一考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高木由起子・廣瀬幸市	4. 巻 11
2. 論文標題 社会変化に伴う現代青年の特徴に関する一考察 多元的自己と「ネット的思考」の影響	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要	6. 最初と最後の頁 24-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Koichi Hirose
2. 発表標題 A study about practical knowledge conveying implicitly in the field of educational counseling
3. 学会等名 Les Sciences Humaines et Sociales a l'Epreuve du terrain（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 廣瀬幸市・松原正明・牧野昌子・下山京美・久保優一
2. 発表標題 教育相談の校内支援体制における世代間伝達に関する質的研究(1)
3. 学会等名 日本学校教育相談学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 廣瀬幸市 (山本智子 編集)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 228
3. 書名 「学校」を生きる人々のナラティブ：子どもと教師・スクールカウンセラー・保護者の心のずれ	

1. 著者名 廣瀬幸市 (中島登代子編集)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 創元社	5. 総ページ数 261
3. 書名 心理療法の第一歩	

1. 著者名 Koichi Hirose, Morioka M. et Matsumoto K. (sur la direction de Herve Breton)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 L'Harmattan	5. 総ページ数 306
3. 書名 Chronique du vecu d'une pandemie planetaire	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------